

とがむれ

# 樽牟礼城址と関連遺跡発掘調査概報 I

佐伯地区遺跡群発掘調査概報 I



1988

佐伯市教育委員会

## はじめに

榑牟礼城は、平安時代末から江戸時代直前まで佐伯氏の領主であった佐伯氏が築いたものといわれています。築城の時期は不明ですが、江戸時代初めに書かれた「大友興廃記」や「榑牟礼実録」によれば、16世紀前葉には存在したようです。従ってその頃の佐伯氏の居館が城下町の遺構は、榑牟礼城址の周辺に残っているものと思われます。しかし、それ以前の居城や居館等がどこにあったのかは記録に残されておりません。

ところで、佐伯市内には中世山城址や居館所在地と考えられている所が、この他にもいくつかあります。しかし、未だに遺構の実態や所属年代は調査されていません。現代まで残されてきたこれらの文字をもたない歴史資料も、今、対策を考えなければ将来的には道路工事や宅地造成、区画整理その他各種の原因によって次第に蚕食されてゆくのではないかと危惧されます。

佐伯市教育委員会では、今年度からこれらの遺跡の実態調査を実施して、将来の遺跡群保存のための資料とする予定です。今年度はまず、榑牟礼城址の測量と釐の遺跡確認のための試験調査を行いました。

## 例言

1. 本書は大分県佐伯市所在の中世山城址榑牟礼城と周辺遺跡の考古学的調査の概要報告書である。
2. 調査の費用は佐伯市が負担し、大分県教育委員会文化課の文援を受けて調査を実施した。調査の組織は次のとおりである。

調査主体	佐伯市教育委員会	教育長	柴田義夫
		社会教育課長	御手洗正明
		社会教育係長	山嶋栄治
		社会教育主事	山田健一
調査員	大分県教育委員会文化課	埋蔵文化財第1係長	清水宗阳
		主査	坂本嘉弘
		主任	高橋信武
		主事	綿貫俊一

調査協力者 小野英治 江藤磯吉 木許寛 小野喜久 市野瀬部 伊達良信 広瀬繁雄  
木許謙 藤田善代一

3. 本書に使用した図のうち、現地で作製したものは山田と調査員による。P4～8の文章執筆は綿貫、他は高橋により分担した。
4. 本書の編集は、高橋・綿貫があたった。

## 歴史的にみた佐伯

佐伯市は大分県南東部に位置し、江戸時代の城下町として発達してきた市街地は豊後水道に面したリアス式海岸の湾奥に広がっている。市の面積の7割は山地で、平地部は番匠川・堅田川を中心とした河川の流域に存在するが狭少である。

歴史的には、縄文時代早期の遺跡（下城・長良）や中期の遺跡（長良）、弥生時代の貝塚（下城・長良・白潟）が標高10～20mの旧海岸線沿いの山の麓や台地上に発見されている。古墳時代になると、大入島の石棺（東島古墳）・長島の円墳（宝剣山古墳）が知られており、弥生時代につづき海との関連が強く示されている。

奈良時代には、豊後国風土記によれば当地域は海部郡徳門郷と呼ばれ、津久見市・上浦町・弥生町・鶴見町と共に一括されている。

平安時代末になると佐伯康康や緒方惟業といった個人名が、佐伯荘との関連で考えられる人物として史料に登場してくるが、平安時代の具体的な遺跡の存在は不明である。

鎌倉時代、弘安8（1285）年の豊後国図田帳によれば佐伯荘は本庄と堅田村よりなっていて、本庄は佐伯市宗家、堅田村は佐伯氏一族によって分領されていたことが記されている。これについて「佐伯市史」では、本庄を弥生町・本匠村・直川村を中心とした西部地域に、堅田村を南東部の現在の堅田村周辺に比定している。また、弥生町上小倉の磨崖石塔群（鎌倉時代末から南北朝時代の銘文をもつものがある）や、市内鶴岡地区の石塔群の存在などから鎌倉時代の佐伯氏宗家の居館はこのどちらかと推定している。

江戸時代直前の佐伯の中心地は、榎牟礼城東方の古市地区周辺であろうと考えられている。

豊臣秀吉により大友氏が豊後国を没収された文禄2（1593）年、佐伯氏も所領を去り、若干の曲折の後、慶長6（1601）年には毛利氏が入部し、翌年佐伯城を東方に新築し、城下町をその南側に移して現在に至っている。

## 佐伯荘の遺跡

佐伯荘には榎牟礼城址をはじめ佐伯氏時代の遺跡が少なからず存在し、400余年の歴史を語る日を持っている。

堅田川流域の代表的遺跡には、次のものがある。中山砦（堅田地区から北上する場合の北端の峰に位置し、尾根上には堀切が、南側斜面には笈状の段遺構が巡らされている。）。八幡山城（南北に長い尾根上にあり、堀切によって5分割されており、現状は本丸のあった南半分しか残っていない。）。宇山城（南北約400mの連郭式山城で、最高所に本丸がある。）。上の台（台地。山続きには土塁と空堀があり、三方は崖。佐伯氏一族の居館址と推定されている。）。高城（遺構は未確認。）。

榎牟礼城周辺には次のものがある。木戸城（16世紀前半。佐伯惟勝の居城。東西を堀切で区切り、複数の曲輪が西に向って高まり、その南側に犬走りがある。）。曳地（比高20mほどで独立丘陵状をなした場所にある。頂部は約80m×70mの平坦面をなす。16世紀の佐伯氏宗家の居館推定地。）。小田山城（南北の尾根を堀切で区画し、周囲に38本の堅堀を巡らす。）。竹田城（榎牟礼城の支城と推定されている。遺構は未確認。）。十三重層塔（木戸城の東方にある。鎌



- 1 梅牟礼城 2 曳地 3 木戸城 4 十三重塔 5 中山砦 6 八幡山城 7 宇山城  
 8 上の台 9 高城館 10 高城 11 竹田城 12 小田山城 13 小倉磨崖塔 14 河波ヶ城

第1図 佐伯荘関連遺跡分布図(国土地理院5万分の1図「佐伯」「臼杵」)



1 梅牟礼城(東南から) 2 梅牟礼城と小田山城(北から)

5 中山砦(北から)

6 中山砦南斜面



倉時代の造立と推定されている。小倉磨崖塔（8基の宝塔と34基の五輪塔が彫刻されている。在銘のものには嘉暦元（1326）年から康永4（1345）年の年号がある。）。この他、佐伯湾北部に望んで河波ヶ城（山頂は人工的に削平されている。詳細は未確認。15世紀前半の築城と推定されている。）。



### 梅牟礼山の縄張り

先述のとおり江戸時代初め頃の史料には、大永（1521～1527）年間に佐伯荘領主であった11代佐伯惟治の名と共に梅牟礼城の名が初めて現われている。現在、標高223.7mの梅牟礼山頂を中心に、東西1.5km・南北2.3kmの範囲に人工的な掘削の痕跡が残されているが、これらは長期に渡って集積されたこのような姿になったものと考えられる。

主要な遺構は3箇所分布している。1は山頂周辺の梅牟礼城主郭を中心とした部分である。2は1の南東方向の低い山上にあり木戸城と推定されるもの。3は1の南西側の尾根続きにある峯を、独立の城のように造作している小田山城とする部分である。小野英治氏は、1は惟治時代の梅牟礼城の範囲にとどまるもので、2は大永7（1527）年に大友家臣団に攻撃された際の攻城方の陣城であり、後に梅牟礼城の支城として整備された可能性があると指摘している。<sup>(注)</sup>

さて、木戸城・小田山城については来年度以降触れることとし、1の周辺に分布する遺構から説明しておきたい。梅牟礼城主郭部の東北方向と北方には複数の尾根が延びているが、これに面する主郭部直下には遠くからでもはっきり分る堀切が掘削されている。さらに、ここから



1 上の台(東北から)    2 高城(東から)

遠く離れた位置まで堀切や曲輪が連続している。特に東北方向の峯は頂上を平坦に造成したことが明瞭である。

一方、西端の山裾部（図2の網部）には南側斜面にのみ上から下まで、帯状の段を19段巡らした形跡がある。地図ではよく現わされていないが、この部分の北側に細長い尾根があり、先端に近い場所に長さ約10m・高さ50cm弱の石垣がみられる。

主郭部の南方向には、梅牟礼城とは直接には無縁と思われるほど離れて、峯の周囲を削り落した場所と堀切が1箇所発見されている。

次に梅牟礼城中心部周辺の説明を行なうが、名称は今回便宜的につけたものである。なお、今回測量して図化したのは佐伯市である東斜面と尾根上面のみである。西側斜面については、小野氏作製の測量図の提供を受け、加筆して図示した。

中心部は3箇所の郭（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）よりなる。郭Ⅰは70m×10～13mほどで、694㎡ある。やや北寄りにある約1mの段差をもって北部が高く、Ⅰa（338㎡）とⅠb（382㎡）に区分できる。Ⅰbの端には堀切があり、狭い武者溜Ⅰ・Ⅱが階段状につづく。郭Ⅰbの南部から武者溜Ⅱを巻いて、L字型に武者溜Ⅲがある。郭Ⅱは75m×22m（最大巾）ほどの規模をもち、面積は1931㎡ある。北側には浅い堀切があり、これに面して段差20cm前後の低い区画（郭Ⅱa）がある。南側の郭Ⅱbの中央やや東寄りに、方形を基調とした盛土部が2個、斜めに離れて存在する。西側の盛土部に接する西方にも約20cmの段差があり、南側が低くなっている。段差と盛土部の構造物によって、南からの直線的な侵

入を弱める意図が感じられる。

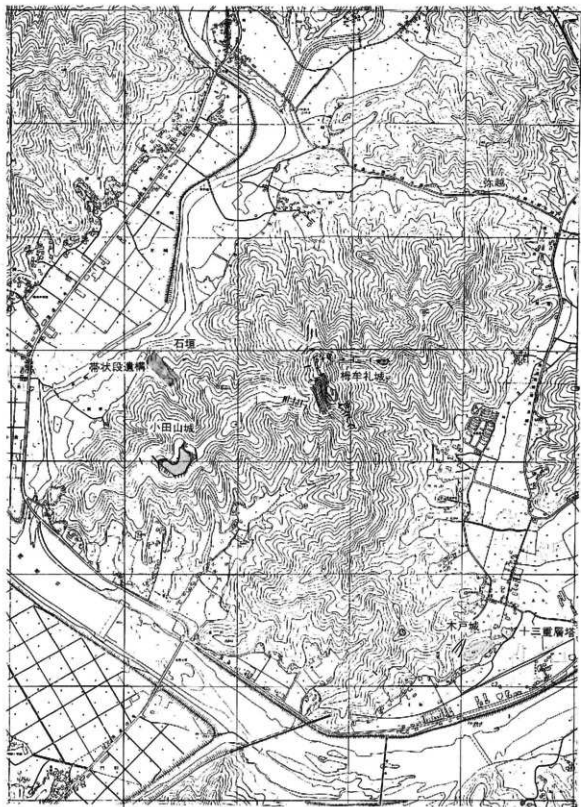
郭Ⅲは郭Ⅱより約22m低い。この間に、武者溜Ⅳと屈折した怪および堀切がある。郭Ⅲは尾根の東側に主体があり、32m×9.5m前後で面積は188㎡ある。東斜面には大型堅堀が3条あり、犬走りと組み合っている。郭Ⅲの南側尾根には堀切が連続し、この南方に小規模の武者溜Ⅴ・Ⅵが続く。西斜面には堅堀が1条認められる。

郭Ⅱの西斜面には帯状の段遺構が半月状に巡らされ、それを取り巻くように南北に曲輪が配されている。この部分の南西方向には、小田山城に続く尾根が延びていて、最も細長い馬の脊状の所には堀切と南斜面に堅堀2条が集中的に並列している。

以上のように各種の遺構が残されているが、郭Ⅰから郭Ⅲまでが梅牟礼城の主体部と考えられ、この間約268mである。外形上からみると、尾根は敵の侵入路となり易いため、堀切を主体に多くの防衛策を備えた連郭式山城であるのが理解できる。なお、郭Ⅲ付近には遺構が集中しており、主な虎口にあたると考えられる。全体的に西側に対する備えが多いことも、居館の所在地を東麓に推定することと矛盾しないようである。

（注）

小野英治「梅牟礼城の規模と構造」『佐伯史談』  
第122号 1980



第2図 梅牟札城を中心とした遺構・遺跡の分布 (方眼は500m)

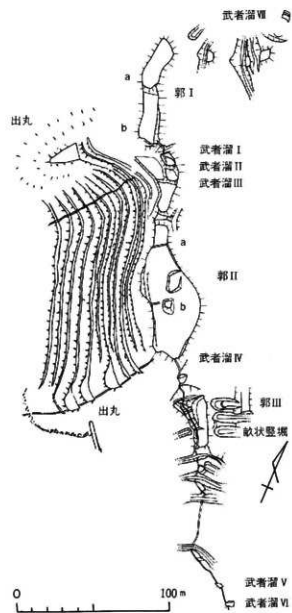




第3図 椿牟礼城と周辺地域の側面見通し図(横=4:5)



椿牟礼城周辺の空中写真(1947年11月6日撮影)



第4図

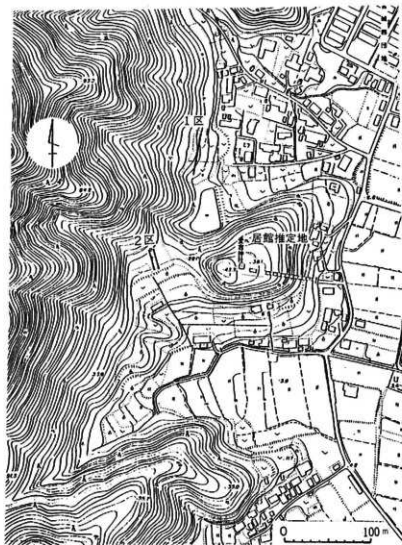


- 1 郭Ⅲ北側の掘切
- 2 郭Ⅲ(北から南を見る)
- 3 郭Ⅲ南側の掘切
- 4 石垣(弥生町)
- 5 郭Ⅲ東側の堅堀
- 6 郭Ⅲ南方の掘切
- 7 郭Ⅰ北側の掘切

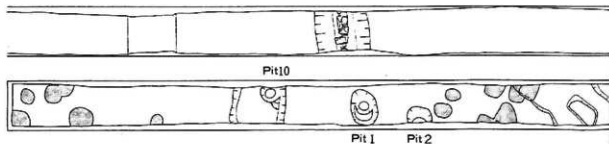
## 古市地区の試掘調査

樽牟礼城の東方の麓周辺には、居館跡と城下町の集落があったのではないかと推定されているが、今年度は2地点（1区・2区）の試掘調査を行った。

1区（大字稲垣字掃木）は果樹園となっている。以前に耕作中に石垣が発見され、石を撤去したということであり、確認のため38m×1mのトレンチを最初掘り下げた。地表下約30cmで遺構検出面となり、東西方向に走る溝（A）と石列（B～D）や不規則な小穴多数が検出できた。溝・石列の延長部を調べるためさらに3本の小トレンチを追加した結果、これらは現状の所有地の境界に対応することが判明した。一方、小穴群の大多数



第5図 古市地区試掘調査区位置図

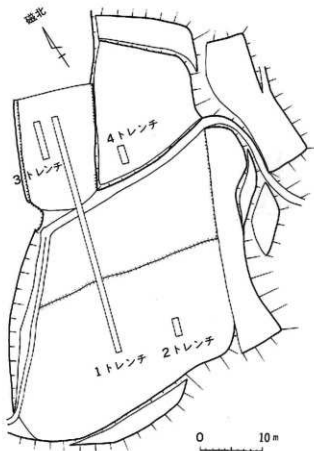


第7図 古市地区1区トレンチ平面図



1区1トレンチ近景

は埋土内のものから現代のもの分ったが、溝Aに上部をこわされている小穴 (Pit 10) およびこれと一直線に連なる他の2個 (Pit 1・2) からは底部糸切りで褐色を呈し、茶色土粒を多く含む土師質土器多数が出土した。図8の1はPit 1出土・2~10はPit



第6図 1区トレンチ配置状況平面図

2出土である。皿形土器と杯形土器がみられ、皿には次の2種類がある。A類(1~3・6)は、口径12.0cm前後で口縁上部で薄くなり急に外反する特徴をもち、B類(4・5)は口径がやや小さく、底部から口縁部までまっすぐ延びるものである。杯形土器は3個あり、それぞれ形態差を始す。なお、石列BからPit 2の南側までは中世の遺物包含層が存在し、石列Bはそれに掘り込まれている。包含層からは土師質土器片と共に、図8の11の中国製の青磁碗が出土した。外面にヘラ描きの蓮弁文をもつ。文様は刺頭と縦線とは単位を意識しないで描

1 2 m



2トレンチ

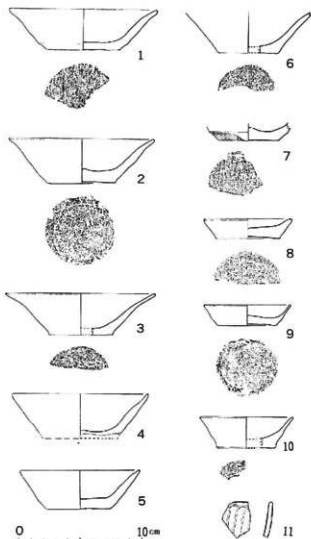


1トレンチ

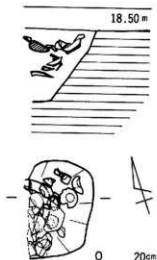


	口径	底径	器高	備考
1	12.1	6.0	3.3	
2	11.8	5.7	3.8	
3	12.2	5.2	3.4	
4	11.0	(6.0)	3.4+ $\alpha$	外底面は剥落
5	9.8	4.8	3.2	外底面器表不詳
6	10.4+ $\alpha$	4.8	3.4+ $\alpha$	
7		5.0		外面に糸切痕つづく
8	6.1	5.2	1.6	
9	7.1	4.8	1.7	
10	7.6	4.8	2.6	

土師質土器一覧表 (cm)



第8図 古市地区1区トレンチ出土遺物実測図



第9図 Pit2の実測図



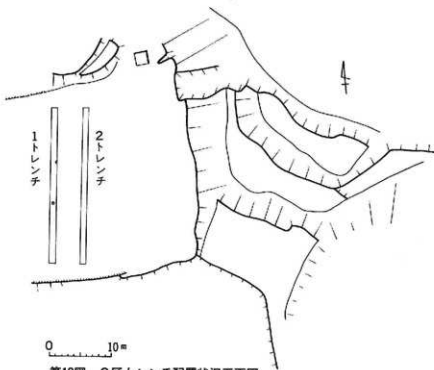
Pit2(南から)

かれている。16世紀後半頃のものである。

2区(大字上岡字大田)は居館推定地  
が背後の山に接続する部分にあたり、西  
部は30m×50mほどの平面台形の平坦地  
をなし、現状は果樹園として利用されて

いる。東部はやや低く、平坦面を三段もち杉林となっている。

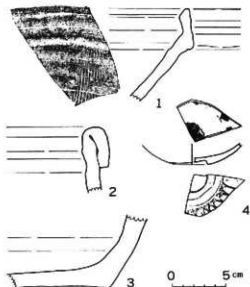
試掘調査は西側部分に、25m×1mのトレンチを5m間隔で2本設定して実施した。その結果、図12に示すようにトレンチの北部は本来の自然地形が削られ、反対に南部は盛土されていることが判明した。トレンチ



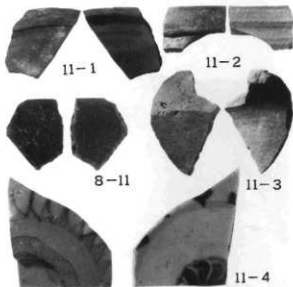
第10図 2区トレンチ配置状況平面図

北半部に平行に走る複数の溝は大戦前後の作業場に関するものらしく、列石の中にはコンクリートの付着したものもみられる。遺構としては1トレンチの2個のPitがあり、他にその中間

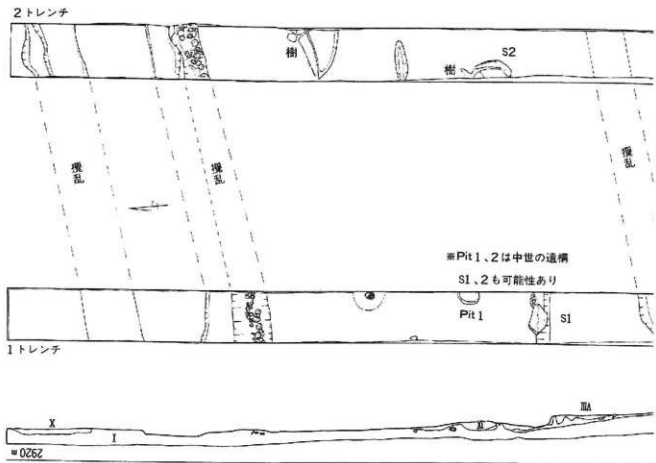
にある大きな石も人工的な配置とも考えられる。遺物は2トレンチ北部より図11の4の中国製染付皿が出土。15世紀後葉～16世紀前半に比定される資料である。



第11図 陶磁器類実測図 (樺牟礼城址・古市地区)



陶磁器類



第12図 古市地区2区トレンチ平面図・壁面土層図



2区近景

この他、表面採集の資料がある。図11の1は、  
 柵半礼城のⅡ郭で採集した備前焼の摺鉢、2・  
 3はⅢ郭の曲輪に椅子を設置した際に出土した  
 備前焼甕である。これらは備前焼編年のV期の  
 もので、桃山時代に比定されている。



### 層序

- I層…表土
- II層…客土。IX・X層等ローム層を主に混入する。
- III層…軟質。サラサラする。7.5YR5/6(黄褐)
- IV層…硬質。下層とは明瞭な境界をなさない。10YR5/6(黄褐)
- V層…アカホヤ火山灰のブロックが主。硬質。部分的にVIが混入する。10YR7/8(黄橙)
- VI層…軟質土層。小角礫を少量混入する。7.5YR3/2(黒褐)
- VII層…粘質土層。角礫を少量混入する。10YR4/6(褐)
- VIII層…粘質土層。10YR5/6(黄褐)
- IX層…軟質土層。九重火山起源のKJP<sub>1</sub>に似る。10YR6/6(明黄褐)
- X層…角礫を多く含む地山。

Pit 2



0 1 2 m

## おわりに

今年度は短期間の調査であったが、樽牟礼城址では踏査により多くの遺構が確認できた。古市地区では2地点で試掘調査を実施したが、いづれも中世の遺構が存在することが確認でき、今後はその分布範囲を把握することも一つの課題となってきた。1区で出土した土師質土器は、大分県内でも類例不足の段階である。それ自体

では時期比定は困難だが、陶磁器類の年代が15・16世紀代であり、16世紀代のものと思われる。調査面積は少ないが、鎌倉時代や室町時代前半にさかのぼるものが未発見であることは興味深い。本丸周辺の測量は来年度も継続する予定である。

今年度は手をつけなかった山城址や居館推定地についても、来年度から測量と発掘調査を行なっていきたい。



---

梅牟礼城址と関連遺跡発掘調査概報Ⅰ

佐伯地区遺跡群発掘調査概報Ⅰ

発行年月日 1988年8月31日  
発行者 佐伯市教育委員会  
〒876 大分県佐伯市中村南町1-1  
☎ 09722-2-3111  
印刷 樹コム・大分  
〒874 大分県別府市上田の湯3-8  
☎ 0977-25-1243

---

表紙：梅牟礼城址(右)と館跡推定地(左手前)